

男と女の不完全マニユアル

天王星の男と女

薄井ゆづじ



株式会社 ウィアックス

天王星の男と女

70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
帰郷	薔薇	光速	切符	陽炎	人魚	操縦	踏切	白鷺	海峡

海峡

冬が近付くと男たちは橇に荷物を積んで、旅支度をはじめ。橇は食料でいっぱいになる。穀物、木の実や果物、葡萄酒もある。寒風が雪を運んでくるころには、それらを満載した橇を六頭の犬に引かせて、凍結した海峡を渡るのだ。

海峡は潮の流れが強く、完全に凍結しないかぎり渡ることはできない。その明け方、サイレンが鳴った。流氷が接岸して、この冬、はじめて凍結したという合図だ。男たちは待ちきれない様子で、海峡の氷原へ橇を出す。

私も犬橇に引かれて、海峡を埋め尽くした氷原を渡りはじめた。何十、何百という橇が男たちを乗せて北へ疾走する。いちめんの銀世界のなか、空と氷の境界線を目指して彼方へ、彼方へと走る。夜は氷上にテントを張って眠り、七日目の夕刻、行く手に陸地の影が見えてくる。男たちは歓声を上げて橇を急がせ、犬もそれにこたえて最後の力を振り絞る。

陸地では、女たちが橇を待っている。正確に言えば男たちを待っている。あるいは橇に積まれた食料や甘い菓子類を。

陸にたどり着き、私は一人の女に近付いていった。小肥りの、優しい顔立ちの女だ。しばらく見ないうちに、さらに肥ったようだ。

「元氣か」

「この通り」

女は笑って両手をひろげ、くるりとバレリーナのように回ってみせた。その腰を抱きしめて口を吸うと女は待ちきれないというように、

「小屋のなかへ」と、私を導いた。

こうして私と女の、楽しく長い冬がはじまる。北の大地の厳しい寒さは、暖炉と女が温めてくれる。この大地には熊や鹿、海獣たちが群れをなしていて、狩猟はさして難しくない。海峡の氷の下には濃い魚影が潜んでいる。

私は日中は狩りをして、夕刻は獲物をさばく。乾し肉をつくり、毛皮を加工する。魚肉は干したり塩漬けにしたりして、内臓は絞って灯油をつくる。捨てるものなどない。

夜はアザラシのスープと、南の大地から持ってきたワインで夕食をとり、女と語らう。

「このワイン、とても美味しいわね」

「葡萄が豊作だったからな。今年のアザラシはいつもより脂がのっけていてうまい」

「餌が豊富だったの。魚は大漁つづきで、女だけでも簡単に獲れたもの」

「それでかな」

「何が？」

「お前が、むちむちしてるわけがわかったよ」

「いやあね」女は豊かな乳房を揺らして笑う。「ねえ、夏の話聞かせて」

二つの陸地を隔てている海峡は十一月ごろに凍結し、四月まで櫂で渡れる。男たちは冬のあいだは北の陸地

で狩りをしながら過ごし、夏は南の陸地で稲を育て、果樹や木の実を採って過ごす。北の陸地を「冬の国」、南の陸地を「夏の国」と呼ぶ。いま女が、夏の話聞かせて、と言ったのは、南の大地の話聞かせて欲しいという意味だ。

私は葡萄の実を酒に変える作業について語りはじめた。時間はたっぷりある。ゆっくりと、春までに話し終えればいい。女は夏の話に、うっとりとした表情で聞き入る。

葡萄酒の話が終わるころ一月が過ぎ、蜜蜂が花の蜜を集める話は二月に終わった。そして菜の花から菜種油を絞る話になるころ、私はそろそろ旅支度をしなければと思った。春が近いからだ。

女は冬のあいだ、私の話をじっと聞いていた。遠い南の大地に思いをさせている様子だった。だが彼女には行くことのできない大地である。冬の女は生涯、北の大地で暮らすという掟があるからだ。

春が近づくにしたがって、あんなに陽気で屈託のなかった女が、次第に沈みはじめる。毎年のことだが私はうんざりした。迎えるときは陽気で明るく、去るときは暗く不機嫌になるという女の特徴を私は恨む。

もう南の大地の話も聞こうともしない。明るい日射しのなかでひらく花々や、飛び交う昆虫や、青空に羽ばたく小鳥の話にしても、女は素っ気なく相槌を打つだけになった。

「春なんか来なければいい」と女は言った。「夏なんか、大嫌い」
「どうして」と、私は言った。

答を知らないわけではない。しかし男は、どうして、と訊いて女にその答を思う存分喋らせなければならぬ。

春が来れば男たちは帰ってしまう、長い夏を男たちは蜜蜂を追って楽しく暮らし、女たちはここでじっと冬を待たなければならない、だから夏なんか来ないほうがいい。